

イタリア経由インド行き

NORIKO KAZUKI '90 SPRING-SUMMER COLLECTION

フィナーレの香月ノリコ



今シーズンのNORIKO KAZUKIは、コレクションのテーマを「カシミールの夏」として展開した。繊細を極める曲線の描くアラベスク模様のプリントやジャカードニット、ボディを立体的に包んで鈍く光るインドシルク、ガラス細工を思わせる白糸刺繍、モスク内部の鮮やかなモザイクの色彩のようなグラデーションカラーのコオーデイネート——インドからのエスプリを大人のエスニックとして昇華させていた。

香月ノリコは語る。

「私の場合、コレクションは素材選びからスタートします。数限りない布地を前に、触って、眺めて、感じて、きっかけを自分の内部で探していくのです。今回は、ペーズリー柄の布地が私に第一歩を指し示してくれました」

「実際にインドへも旅して、イメージはよりふくらんでいった。ニューデリー、オールドデリー、そして、カシミール地方の避暑地スリナガルなど、意欲的な旅程である。イタリアでのキャリアの長いこのデザイナーの視線は、インドを強く神秘的にとらえたようだった。

「ヨーロッパや日本では、きれいなものはきれいなところにあるのがふつうでしょう。ところがインドでは、砂漠からの風で茶色くなって、見方によっては汚いともいえるマーケットの中に、それは美しい果物やアクセサリー、陶器を見つけられることができるのです。寺院では、南国の強い日ざしに深くしわを刻まれた年老いた女たちが、鮮やかなターコイズブルーのサリーに身を包み、はだしにアクセサリーをつけて、お参りしているのです」

インドのさまざまな光景から受けるあの種のショックをエネルギーとしてのコレクション作りは、インドの衣装をそのまま生の形で取り込むのではなく、香月ノリコの世界として、エレガントなシチュエーションを生み出した。

「豊潤な色彩と、構造的なフォルムに定評のある彼女だが、今回はことに色彩に目をみはらせるものがあつた。

「私はとにかく色が好き。今回は、無駄づかいと云っていいほどぜいたくに色をつかい、コオーデイネートしました。でも決して無駄とはいえない成果が得られたと喜んでいきます」

ひとつとして同じブルーのないグラデーションのシリーズの計算しつくされた色の遊びは、大人の感性ならでは。そして、その後にくつもの素材を白一色にまとめた一群の新鮮な驚き。

「これは、タージ・マハールからのインスピレーション。イスタンブールの青のモスク、フィレンツェのサンタ・マリア聖堂と並んで、私の最も美しいと思う建築なのです」



Photos: Hiroyuki Tachibana (B.P.B.)